

東西文明の比較 (15)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

卑弥呼の時代は、弥生時代の後期から古墳時代への過渡期と考えられます。そして、弥生時代は、戦乱の時代であったといわれます。縄文時代の弓矢は獣を捕る道具でしたが、弥生時代になるとそれらは人を殺傷する道具に化しました。吉野ヶ里遺跡をみると、見張り台・のろし台や防御のための環濠などが戦いに備えていたことが分ります。のどかであった縄文の日本が、弥生時代になってなぜ「戦乱」を招いてしまったのでしょうか。

一般的には、「農耕社会の誕生、つまり水田耕作を主たる生業になった結果、「土地や灌漑

用水の確保」が争いの原因になった」「余剰食糧が貧富の格差を起こした」ことに拠るともいわれています。どちらも正しいと考えられますが、実はもうひとつの原因があったという説があります。後漢書の「東夷伝」の記述に注目します。

「安帝永初年(107年)倭国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う」とあります。この文中にある「生口」とは、戦いにおける「捕虜」のことです。広義では「奴隷」と解釈します。

卑弥呼は、239年、243年に「男の生口四人、女の生口六人」を魏の皇帝に献じ、さらに卑弥呼の宗女(跡継ぎ)の台与も「男女の生口三十人」を献じています。ちなみに他の東アジア諸国から「生口」を献じた例は、4～5世紀からです。倭による「生口」の献上は特出しています。

「生口」は捕虜で、牛馬なみの奴隷でした。倭が早くから朝貢品としたのは、他国に比べて特産品がほとんどなかったことが原因と考えられます。「生口」を獲得するために、争いを起こしたとは考えたくありませんが、穏やかな縄文時代とは異なる日本の姿が見られます。

次にこの時代の「大陸」を見てみましょう。

中国周辺民族の台頭と高句麗の勃興

3世紀後半から4世紀にかけて、中国は「五胡十六国」になります。華北には周辺の異民族が大量に移住してきました。西からは西戎、北からは北狄が侵入しました。晋書に「陝西の関中の人口百余万、そのうち半ばを占めるのは戎狄なり」とあります。

朝鮮半島では、高句麗が誕生しました。楽浪郡と帯方郡を開放して、朝鮮半島から中国を追い払いました。高句麗の北方に夫餘というクニがありましたが鮮卑族に追われていました。高句麗は、この夫餘の人々を受け入れ、建国の中核に据えました。高句麗は上記のように建国の過程で鮮卑族との摩擦を招きましたが、その際は楽浪郡と帯方郡の中国系移流民の力を借りて生き延びたのです。

やがて4世紀後半には馬韓から百済が、辰韓から新羅が誕生しました。百済の生誕地は楽浪郡と帯方郡と接する伯濟国の漢城で、やはり建国には両郡の中国系の人々が発展に貢献したようです。新羅は、辰韓諸国の雄、斯盧(しろ)が周辺諸国を統合して誕生しました。377年には五胡十六国のひとつである前秦へ、高句麗の先導で朝貢したといわれています。以来、高句麗と新羅は行動を共にします。それに対抗して百済は、倭と同盟関係を築きます。なお、この時代の朝鮮半島には、先に挙げた3国のほか、任那・加羅・秦韓・慕韓の7カ国がありました。

広開土王碑文について

高句麗の広開土王の墓が鴨緑江西岸(中国吉林省集安県)にあります。そこに6メートルを超える巨大な石碑があります。碑文は、1775文字。その一部を次に記してみます。

「百残(百済)・新羅、旧より是れ属民にして、由来、朝貢せり。而るに倭、辛卯の年(391年)より以来、□を渡りて百残を破り、新羅を□□し、以て臣民を為せり。以て永樂六年の丙申(396年)、王、躬ら□軍を率い、残国を討伐す」とあります。この碑文によって、倭と朝鮮半島の関係がわかります。(□の所は、破損により「文字」が読めない部分です)。

倭の五王が東晋へ遣使

倭の五王とは誰でしょうか。「讚・珍・濟・興・武」の

